

2021年 年頭所感

一般社団法人 日本映像ソフト協会 会長 吉村 隆

新年あけましておめでとうございます。

2020年を振り返りますと、一言で申し上げて、新型コロナウイルスに翻弄された一年だったと言えるでしょう。皆様におかれましても、かつて経験したことのない環境の変化にご苦労されたこととお察し申し上げます。

こういった状況の中、当初、「巣ごもり需要」と言われる新たな恩恵により、ユーザーのニーズを取り戻す兆しを見せました。メーカー出荷が前年を上回るなどの現象が見られました。しかし、いずれも、4月以降の映画館の営業自粛やライブ、イベントの中止、アニメやドラマ作品の制作延期などによる新作発売の遅れが影響し、最終的には市況を下振れさせることとなりました。そして何よりもユーザーの行動自粛自体が市況を悪化させた主要因であることはいうまでもありません。

とはいえ、暗いニュースだけではございません。10月に劇場公開されました「劇場版 鬼滅の刃」は、10日間の興行収入で100億円を突破する最高のスタートを切り、多くのメディアでニュースとして取り上げられました。本作以外にも見込みを上回る興行収入を上げた作品も多々あると聞いております。こういった苦しい時期だからこそ、良質なコンテンツの力が、多くの方々に勇気を与え、元気にするのだということを再認識しました。今後も、われわれコンテンツ業界から良質の作品を世に送り出すことで、社会に貢献していきたいと考えております。

昨年11月までのメーカーのパッケージソフトの出荷統計の状況は、前年と比べますと約1割の減少となり、消費者のニーズは減少傾向にあります。一方のJVAメーカーの映像配信売上統計では11月までの実績で15パーセント以上の伸長となっており、視聴形態がデジタルにシフトしている様子が見て取れます。コロナ禍での行動自粛以降、この傾向は顕著に表れており、図らずも新型コロナがユーザーのデジタルシフトを加速させた格好になっています。JVAとしましても昨年、「eメディア部会」を「デジタル配信部会」と改称し、デジタル配信の研究・促進に特化した活動を行うようリスタートを切りました。従来の「マーケット調査委員会」の活動と併せ、フィジカルとデジタル、双方のターゲットとなるユーザーの動向を的確に捉え、フィジカル、デジタルの両市場をバランスよく育成していきたいと考えています。

一方、海賊版対策につきましては、昨年、大きな進捗をいたしました。昨年6月5日に著作権法改正法が成立し、10月1日よりリーチサイト規制に関する法律が施行されました。リーチサイトとは、簡単に申し上げますと、侵害コンテンツへのリンク情報を集約した海賊版誘導サイトのことであり、これに対し著作権侵害として刑事罰が科せられることになりました。我々の最終的に目指すところは、制作者が正当な対価を得、それを資金として新たなコンテンツを生んでいく、というコンテンツ・エコシステムを守ることにあります。

引き続き、関係諸団体と共に、海賊版撲滅に向け努力してまいる所存です。

いつになるか予測は出来ませんが、ワクチンの供給や特効薬が開発されない限り、「新型コロナウイルスの終息」はしないでしょう。世の中のニューノーマルが如何になろうとも、「良質な作品」を生み出し続ける努力、その作品を消費者の皆様へ届け需要を喚起する努力を積み重ね、ますますの業界の発展に尽力してまいりたいと思います。

本年も、会員各社、関係官庁、関係団体等の皆様からの一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。また何より、皆様方のご健康を心から祈念いたします。

今年も、どうぞ宜しくお願い致します。